

宋之問論(上)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高木, 重俊 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00003314

宋之問論（上）

はじめに

宋之問は沈佺期とともに「沈宋」と並称され、とりわけ律詩の成立に寄与したことで知られる初唐の宮廷詩人である。宮廷詩人は詩才をもって帝王に仕え、詩によって帝王を讃美する存在であり、応制詩などの宮廷文学はいわば公的な文学であるから、詩人みずからの個人的心情の表白を第二義とする宿命を強いられ、詩人の文学的個性は宮廷詩からは感じにくい。しかし、彼らの生涯をたどってみると、権力への欲望が陰に陽に渦巻く宮廷において、宮廷詩人という華やかな仮面とはうらはらに、詩を抛りどころにするしかない弱い立場の人間が、その荒波の中を回遊して身の安泰をはかり、さらに官僚としての栄達を求めようとする生き方が示される。

本稿では宋之問について、その生涯を可能な限り詳細に跡付け、宮廷で活躍することが詩人の至上の榮譽とされた時代に生きた彼の文学的個性に考察を加えるつもりである。上篇では彼の生い立ちから瀛州に流謫され、配所から洛陽に逃帰するまで、下篇では中宗朝に宮廷詩人として復活してから二度目の流謫を経て死に至るまでの

時期を取り上げる。また、下篇では、中宗朝の宮廷文壇の活動についても触れる。

なお、沈佺期については、拙稿「沈佺期の生涯と文学」（『中国文学』一九八六Ⅱ漢文学会会報第四四号、一九八六年六月、大塚漢文学会）を参照されたい。

一

宋之問、字は延清、『旧唐書』本伝では號州弘農の人とし、『新唐書』本伝では汾州の人と記す。『元和姓纂』卷八では、弘農の宋氏は西河（汾州）から移ったものとする。宋之問自身が「祭楊盈川文」で「西河の宋某」と自称するのは、宋氏本来の地を指して言っていることになる。

父の宋令文は、高宗朝に左驍衛郎将（正五品上）・東台詳正学士になっている。『旧唐書』『高宗紀』ならびに「吐蕃伝上」には、調露元年（六七九）十月に、郎将宋令文を吐蕃の贊普の葬儀に立ち合わせたと記す。また東台詳正学士は、門下省（東台）弘文館の図籍

旧書を校理する任務の学士で、『新唐書』『百官志二』には、儀鳳年間（六七六年一月―六七九年五月）に設置されたと記す。宋令文は左驍衛郎将と弘文館詳正学士を兼ねていたわけで、文武に秀でた人物であったと言えよう。『旧唐書』『経籍志下』・『新唐書』『芸文志四』には、ともに「宋令文集」十巻があったことを記録している。さらに、『旧唐書』『方伎・孫思邈伝』には、上元元年（六七四）に方士孫思邈（六〇一―六八二）が病と称して帰休を請うたとき、高宗が特に良馬と鄱陽公主の邑司（府属）を賜わって優遇したという記述の後に、「当時の知名の士宋令文・孟詵・盧照鄰ら、師資の礼を執りてもつて事ふ」とある。高宗朝の末期、宋令文は中級の官僚ではあったが、「知名の士」であつたのである。彼が著名であつたのは、両唐書「宋之問伝」に記すように、文詞・勇力・書の三つの分野に秀で、当時の人に「三絶」と称讃を受けるほどであつたためである。この三絶は、三人の子に一絶ずつ受け継がれたという。之問が文詞、之悌が勇力、之遜¹が書である。宋之問は、この父から受けた文学の才能を抛りどころに、宮廷詩人としての人生を歩むのである。

宋之問の生年について、傅瓊琮氏は高宗の顕慶元年（六五六）、あるいはこれよりもやや前であろうと見ておられるが、本稿ではひとまず傅氏の見解に従って、宋之問の生涯をたどって行くことにする。

宋之問の少年時代の事蹟に関しては、全く記録はないが、早熟の詩才をあらわしていたようで、『旧唐書』本伝には「之問、弱冠にして名を知られ、尤^{とく}け五言詩を善くし、当時よくその右に出る者なし」と記される。この詩名の高さは、上元二年（六七五）の進士登第に役立ったかも知れない。この時の状況は鄭益で、ともに及第

した者の中には、沈佺期・劉希夷・張鷟らがいる。彼らはそれぞれ詩文をもって後世に名を残すことになる。宋之問の詩名は進士合格によってますます高まったであろうが、登第ののち彼がいかなる官職を得たものかは明らかでない。初唐の四傑のひとりである王勃（六四九―六七六）に「夏日宴宋五官宅觀画幃序」がある。この「宋五官」は宋之問を指す³と思われる、王勃は上元三年に没しているから、宋之問は進士合格の前後に何らかの官職を得ていた可能性も考えられるが、史書に記されていない。

宋之問の文学修業において見落せないのは、やはり四傑のひとりである駱賓王（六三〇？―六八四⁴）との交友である。駱賓王には「在兗州餞宋五之問」「送宋五之問得涼字」という、宋之問を餞送する五言律詩がある。また彼には別に「在江南贈宋五之問」という七十二句にのぼる五言の長篇詩があり、官僚社会の悪意と非情に弄ばれた駱賓王の憤懣と悲嘆が蟬聯体の技法にのせて縣々と語られている。彼は儀鳳三年（六七八）に侍御史となつてのち、収賄容疑で獄に下され、恩赦によつて出獄して調露二年（六八〇）に浙江の臨海県の丞に左遷されるが、宋之問に贈ったこの詩は、その赴任の途次に作られたと考えられる。彼は詩の掉尾において、

文史盛紛綸 文史 紛綸 盛んなるも

京洛多風塵 京洛 風塵 多し

猶輕五車富 猶ほ五車の富を軽んじ

未重一囊貧 いまだ一囊の貧を重んぜず

李仙非易託 李仙は託し易きに非ず

蘇鬼尚難因 蘇鬼も尚ほ因り難し

不惜勞歌盡 惜しまず 勞歌の尽くるを

誰爲聽陽春 誰か為に陽春を聴かん

とうたっている。前四句には自己の「五車」の「文史」の才能も洛陽の「風塵」の前に為すところもなく消耗した挫折感がうたわれ、後四句では、後漢の河南尹李膺が郭林宗と神仙の交遊をしたこと、楚に赴いた蘇秦が楚王の謁者に会うのは鬼に遇うより困難だと述べた故事を引いて、自分がよく理解者に恵まれなかったことを嘆き、「陽春の曲」を唱和しあえるような心の友を求める思いを述べている。

駱賓王と宋之問の年齢差は二十五歳前後になろうかと思われるが、その駱賓王がこのような心情を、おそらくは無官、あるいは卑官の身であった宋之問に吐露することは、両者の深い交遊を示すに足る。駱賓王と宋之問の父の宋令文との間に深い交友関係があり、それが宋之問に及んだのかも知れないが、この詩が極めて多くの対句と典故を含み、蟬聯体を多用する技巧的な作品である点から見ると、両者の交遊は詩作とも密接に関わっていたと考えられる。ただ、宋之問にも駱賓王に贈る作品があったのであろうが、現在では一首も残っていない。

宋之問が、王勃・駱賓王、そして後述する楊炯と交遊があったことは明らかであるが、盧照鄰については不明である。しかし、前引『旧唐書』『孫思邈伝』に宋之問の父の宋令文が盧照鄰らとともに孫思邈に師事したとあるから、あるいは父の交友との関係で、宋之問が盧照鄰と接したことはあったかも知れない。『太平広記』巻二一「孫思邈」の条には、盧照鄰らとともに孫思邈に師事したのは宋令文ではなく宋之問と記されており、こちらが正しいのであれば、彼らの交遊の可能性はより強くなる。

王勃・楊炯・盧照鄰・駱賓王は、その存命中から「王楊盧駱」と並称される著名な詩人であった。宋之問みずからも景龍二年（七〇

八）に書いた「祭杜学士審言文」の中で「後に復た王楊盧駱あり」と述べ、同時代における四傑の文学的業績を高く評価している。「弱冠にして名を知られ、尤け五言詩を善くし、当時その右に出る者なし」と評されるに至る宋之問の文学修業において、すでに名声を確立していた四傑の存在はひとつの標べであり、彼らとの直接間接の交遊が、彼の文学的開花に大きく作用したであろうことは想像に難くない。

さて、進士合格後の宋之問にとって、「方外の十友」と称される交友関係は見落せないところである。『新唐書』『陸余慶伝』には、趙貞固（諱は元）・盧藏用・陳子昂・杜審言・宋之問・畢構・郭襲微・司馬承禎・史懷一の名が挙げられ、これに陸余慶を加えた十人が「方外の十友」と称せられたという。この方外の十友に関しては、道上克哉氏に「陳子昂の交友関係——方外の十友をめぐる——」という詳細な論がある。⁽⁵⁾氏によれば、方外の十友は六八〇年前後に嵩山において、潘師正や田遊巖という高名な隠士の影響を受けて形成されたもので、十友のうちのまだ誰もが世に出ていないころに結ばれた交友関係であった。彼らのうちで純粹に方外を事とする立場にいたるのは、道士司馬承禎（字は子微）と僧侶史懷一のみで、進士科ならびに下筆成章などの諸科に及第しているのは、盧藏用・陳子昂・杜審言・宋之問・畢構・陸余慶らである。趙元は武后の称制の初めに宜祿の尉に調せられ、ほどなく官を棄てて隠棲している。また、郭襲微は、陳子昂（六五九—七〇〇）⁽⁶⁾の没後に盧藏用が書いた「陳氏別伝」の中で「処士」と記されている。司馬承禎や史懷一という超俗の立場にいる人物を除けば、彼らの多くは、「進士に挙げられて調せらるるを得ず」（『新唐書』『盧藏用伝』）、「位の才に配せざるを傷む」（『新唐書』『趙元伝』）などに示されるように、それ

それに複雑な内的事情を引きずっていたであろう。六九六年に趙元が没したとき、宋之問がありし日の趙元を夢に見て、盧藏用と陳子昂に詩を贈った。陳子昂の「同宋參軍之問夢趙六贈盧陳二子之作」はそれに唱和した詩であるが、彼はその中でかつての方外の交友に触れ、

始憶攜手期 始めて憶ふ 手を携へし期

雲臺與峨眉 雲台と峨眉となり

達兼濟天下 達すれば兼ねて天下を濟ひ

窮獨善其時 窮すれば独り其の時を善くす

諸君推管樂 諸君は管（仲）・樂（毅）を推すに

之子慕巢夷 之の子は巢（父）・（伯）夷を慕ふ

と述べている。「雲台」は、宮殿の名で功業に喩え、「峨眉」は、

峨眉山で、隠棲に喩える。彼らが初め交友を結んだとき、功業に燃える者もいれば隠棲に志す者もいたのである。『孟子』『尽心上』の「窮すれば則ち独り其の身を善くし、達すれば則ち兼ねて天下を善くす」という言葉ながらに、彼らの多くは榮達兼濟の大望を抱きつつ、展望の開けない身を寄せ合つて、この時期を過ごしていた。したがって、多くの者は管仲や樂毅を推尊するのであったが、ひとたび仕えて官を棄てた趙元だけは、巢父や伯夷に理想の生き方を見ていたわけである。陳子昂のこの詩は、方外の交友に集まつた人々の個人的事情を垣間見せてくれる。

趙元が没した四年後、陳子昂も世を去つた。盧藏用は「宋主薄鳴皋夢趙六、予未及報而陳子云亡、今追為此詩答宋、兼貽平昔遊旧」という長篇の詩を作り、ありし日の趙元・陳子昂をしのび、かつての方外の交友について語っている。その中に次のような表現がある。

坐憶平生遊 坐るに憶ふ 平生の遊

十載懷嵩丘 十載 嵩丘に懷かれり

題書滿古壁 題書 古壁に満ち

採藥遍巖幽 藥を採りて巖幽を遍くす

これによれば、彼らの交友は十年に及んだことがわかる。彼らはそれぞれの個人的事情を懷きつつ、嵩山に集つて、詩や藥の交わりをしたのである。

彼らが方外の趣きに耽っていた十年間、つまり六八〇年ごろから六九〇年ごろの時期、高宗が六八三年に崩じたのち武后が称制し、唐室に連なる有力者を次々に排除し、新たな人材の登用をはかりはじめた。彼ら新進の知識人は、この時こそ飛躍の道を歩めるはずであった。しかし、彼らにはまだ出番が与えられず、一方で、旧勢力の排除のために登用された来俊臣・索元礼ら酷吏の跳梁は、載初元年（六八九）の左台御史周矩の武后への直言によつて徐々に鎮静化して行つたとは言え、「目をもつて語るに至つた」（『新唐書』「酷吏伝序」）時代の窒息的状况は、彼らがまだ出仕前の身であるとは言うものの、彼らに大きな不安をもたらしたであろう。新しい時代に対する期待と不安、そして登第はしたもの、彼らの自負心を満たすにはほど遠い現実的処遇に対する不満、彼ら多くの方外のメンバーの心中には、こうした感情が屈折していたはずである。

彼らはこの十年の間、そろつて嵩山に籠つたのではなく、それぞれの個人的事情によつて嵩山に至り、また、任官などの個人的事情によつて嵩山を去つて行つた。方外を慕う人々は彼らのほかに多くいたであろうが、このような往来の中で、「十友」なる呼称がしだいに定着していったのである。建前からすれば、方外の交遊においては、方外への好尚以外のものは必要がないはずである。しかしながら、彼らがそれぞれ官職を得てこの交遊が自然に消滅したのち

も、彼らのうちに浅からぬ交情が持続されたのは、各人がこの方外
の場を、さまざまな個人的事情から解放されるための、いわば緊急
避難の場としていたことを示す。前に引いた陳子昂の詩の「窮すれ
ば独り其の時を善くす」の句は、そうした事情を端的に言いあらわ
している。

彼らの多くは、「達すれば天下を兼濟せん」という志を抱いて嵩
山に隠棲し、神都洛陽を視界におさめつつ詩酒・琴・菓の交わりを
深め、物外の情に心身を委ねていたのである。しかし、方外の十友
の名声が高くなれば高くなるほど、彼らが恬淡無欲を身上としてい
るだけに、仕進に有利になることは否めない。したがって、「利に
放るの徒、隠に仮りて自ら名とし、以て禄仕を詭^{いつは}する。肩は道に相
摩^よし、終南・嵩・少を号して仕途の捷徑と為すに至りて、高尚の節
は喪^{うしな}はる」（『新唐書』「隱逸伝序」）と看破される側面がないわけ
ではないのだが、帝駕が洛陽・長安を往還するのに合わせて嵩山・
終南山と隠棲の場を移し、「隨駕隱士」と称された盧藏用ほどに、
他のメンバーは打算的ではない。それは窒息的世相の中で、みずか
らの未来に展望を見出し得ないでいる各人が、方外の交遊を精神の
解放の場としていたことと無関係ではないだろう。

さて、十友のメンバーであった宋之問の方外への好尚の形成には、
父の宋令文の影響があったと思われる。宋令文が方士孫思邈に師事
したことはすでに述べた。また、そのとき彼や盧照鄰とともに孫思
邈に仕えた孟詵は、「少くして方術を好んだ」（『旧唐書』本伝）人
物であるが、その名は、陳子昂が故趙元のために書いた「昭夷子趙
氏碑」の中に、趙元の友人として宋之問とともにあらわれる。宋之
問には陸渾（洛陽から六十キロほど伊水の上流）と藍田（長安の東
南約四十キロ）に山莊のあったことが知られているが、おそらくは

父から受け継いだものであろう。方外の十友の交遊が始まったと思
われるころ、宋令文は吐蕃に使いしており、健在であった。陸渾の
山莊は、『全唐詩補逸』卷三に宋之問の作として収められる「嵩南
九里旧鵲村作」の冒頭で「弊廬は箕・穎に接し、北のかた嵩山の隅
を望む」とうたわれるように、箕山・潁水に隣接し、嵩山を遠望で
きる場所にあった。これらの地は、巢父・許由の伝説的時代から、
隱者の棲みかとして知られる。宋之問の方外への志向は、少年のこ
ろから自然に育まれたと言つてよいだろう。

彼は上元二年（六七五）に進士に登第してのち、陸渾の山莊や嵩
山の地を舞台に、十友のメンバーや道士田遊巖・韓法昭らとの交遊
に身をまかせていたのである。『新唐書』「隱逸伝」によると、田遊
巖は嵩山の隱士で、高宗が親しく存問して太子洗馬を授けた。垂拱
元年（六八五）に裴炎との交遊に坐して嵩山に放逐されたのちは、
蚕衣耕食して当世に交わらず、韓法昭・宋之問と方外の交友を結ん
だという。韓法昭は宋之問の「使至嵩山、尋杜四不遇、慨然復傷田
洗馬・韓觀主、因以題壁贈杜侯杜四」という詩によれば、道觀の觀
主であった。

宋之問の方外への志向は、出仕したのちも変わることがなかった。
たとえば、陸渾の山莊における生活のひとつまは次のように描かれ
る。

歸來物外情　　歸來せり物外の情
負杖闕巖耕　　杖を負ひて巖耕を闕る
源水看花入　　源水　花を看んとして入り
幽林採藥行　　幽林　藥を採らんとして行く

（『陸渾山莊』前四句）

楚竹幽且深　　楚竹は幽く且つ深く

半雜楓香林

半ば楓香林に雜れり

浩歌清潭曲

清潭の曲に浩歌して

寄爾桃源心

爾に桃源の心を寄せん

〔遊陸渾南山、自歐馬嶺到楓香林、以詩代書、答李舍人適〕後四句

彼は休暇には山行を楽しみ、山人と交わり、菓草を採集し、「物外の情」「桃源の心」にひたりきるのである。

しかし彼は、方外の世界に自己の生涯を託そうとしているわけではない。陳子昂の「達すれば天下を兼濟せん」というような士人としての大な志が彼にあったとは思えないが、榮達への志向は、官人となつた彼の生き方から見て、極めて強いものであつたと言ひ得る。

彼が洛州參軍に任じられて世に出たおり、彼は武后の嵩山登封の大典に随從し、「扈從登封告成頌応制」という作品を武后に上呈するが、その末尾の四句は、

俊重木高

撫己貧非病 己を撫むるに 貧なるも病に非ず

時來本不愚 時來 本もと愚ならず

願陪丹鳳輦 願はくは丹鳳の輦に陪し

率舞白雲衢 率ちて白雲の衢に舞はん

とうたわれる。『史記』『仲尼弟子伝』には、原憲が子貢に向かつて「自分は貧（無産）ではあるが、病（道を学んで行なえない）ではない」と言つたと録されるが、宋之問はみずから原憲になぞらえて、武后の朝に立ちたいという願望を述べているのである。

方外への志向と榮達の願望、この相反する二つの方向は、宋之問の内部では決して背反するものではなかつた。古来、現実挫折し絶望して方外の志を抱いた人は多い。これは、方外の場合が反現実の性格を持つためである。そして、現実と反現実とは、理性的には両

立しがたいのがふつうである。しかし、宋之問の場合、方外と榮達とは二者択一のものではなく、統一され相乗的に止揚されるものであつた。これは思想のレベルではなく、感性や好尚のレベルによつて動く人物であつた。彼の士人としての無思想性は、自己主張をしてはならない宮廷詩人としては有力な武器になつたけれども、また、みずからの身を誤らせるものにもなつて行くのである。

二

宋之問の「秋蓮賦」序によると、武后が国号を周と改めた天授元年（六九〇）秋、彼は習芸館學士として楊炯とともに洛陽城内の習芸館に宿直している。習芸館は宮人に書算や他の技芸を教習する内教坊である。このとき宋之問は約三十五歳、楊炯は四十一歳であつた。このうち、両者の交遊は親密の度を増した。宋之問の「温泉莊臥病寄楊七炯」詩は、洛陽の南郊と嵩山の風物を叙したあと、「惜しむらくは載酒の人なく、徒らに涼泉を把りて掬ふのみ」と、楊炯の來訪を促して結ばれている。また、彼は楊炯の没後に「祭楊盈川文」を書いており、その中では、

大君有命、徵子文房、余亦叨忝、隨君頡頏、同趨北禁、并拜東堂、志事俱得、形骸兩忘、載罹寒暑、貧病洛陽、裘馬同敝、老幼均糧。

というように、習芸館學士時代の深い交友の跡が記されている。楊炯は如意元年（六九二）秋、盈川の令として東吳に出で、長寿二年（六九三）からさほど遠くない時期に官に卒する。彼の柩は兄弟

の手で洛陽にもたらされ、洛陽における葬事は宋之問によって執り行なわれたことが「祭楊盈川文」に記されている。

楊炯の死をもって、文芸上の一時期を画した初唐の四傑はすべて世を去った。宋之問は四傑の晩年に巡り合わせ、とりわけ駱賓王・楊炯と深い文学的交遊をした。彼らの文芸と生涯は、宋之問の目に強く烙きつけられていたはずである。楊炯の死から十五年ほどのちに杜審言が没した。景龍二年（七〇八）に宋之問は「祭杜学士審言文」を書いた。彼はその中で、

位曰大寶、才曰天爵、辭業備而官成、名聲高而命薄、屈原不終於楚相、揚雄自投於漢閣、代生人而豈無、人違代而咸若。

と、位と才の合致しがたい詩人の宿命を述べる。そして、四傑の運命を、

王也才參卿於西陲、楊也終遠幸於東吳、盧則哀其栖山而臥疾、駱則不能保族而全軀、由運然也、莫以福壽自衛、將神忌也、不得華實斯俱。

と捉える。彼らの不遇もまた「運の然るところ」「神の忌むところ」によると言うのである。これは、宋之問が杜審言ともども嶺表流謫を被った後の発言であるから、多分に彼らの身の上を投影させているとも見られよう。しかし、四傑の最後である楊炯が没したとき、彼はまだ官途に就いたばかりであり、自分が親しく敬慕してきた四傑の不遇の生涯が、楊炯の死を契機に改めて彼の脳裏に去来したとき、彼はやはり「辞業」と「官の成る」こととの両立しがたい思いと、四傑の轍を踏むまいという思いに強くとらわれたであろう。「辞」と「官」との両成を求め、「福寿」と「華実」とを追う姿勢は、楊炯の不遇の死により、いよいよ強まったと思われる。

このころ宋之問は、蘇州武丘山の隱士史德義と親交を結んでいる。

史德義はかつて高宗に召されたが病いに託して帰り、のち武后の天授元年に周興の薦によって朝散大夫を授けられた。宋之問が集芸館学士となった年である。翌年十一月に周興が誅せられると、彼も丘壑に放還されるが、この足かけ二年の間、二人には親密な交遊があったようである。史德義の没後に蘇州の旧宅を訪れた宋之問は、「旧交此に零落し、雨泣して遺塵を訪ふ、……、吳中の隠を見ず、空しく江海の浜を余す」（『過史正議宅』）と、ありし日の交遊をしのんでいる。宋之問の方外への好尚は、任官の後も衰えていないのである。

さて、集芸館学士宋之問が洛州參軍（従八品下）に転じたのは、いつのことであつたか判然としない。『旧唐書』本伝には、楊炯とともに内教に分直したという記事のあと、「俄にして洛州參軍を授けらる」とあるところから、天授元年からさほど遠くない時期と思われる。また、いつまでこの任にあつたかも不明であるが、陳子昂との詩の贈答からおおよその見当はつけられる。

万歲通天元年（六九六）九月、陳子昂は右武衛大將軍・清辺道行軍大總官の武攸宜の參謀として契丹征伐に出発した。そのころ宋之問は天平軍に使いに出ており、その帰途に、進軍してくる陳子昂と新郷（河南省新郷市）で会おうと約束してあつたにもかかわらず、進軍の足が速くてすれ違いになつた。宋之問は「使往天兵軍馬、約与陳子昂、新郷為期、及還而不相遇」詩で、「衛に入りて之の子に期せしに、あ^あ少くも留^{しほ}まらず、情人 何れの処にか去る、淇水日に悠々たり」と、面会できなかつた嘆きをうたっている。これに対して陳子昂は淇門鎮（河南省汲県の東北）において「東征至淇門答宋十一參軍之問」という詩を作り、宋之問に寄せている。この詩題から、当時宋之問は洛州參軍であり、その身分で天兵軍に使いしたものであることがわかる。陳子昂はこの詩の冒頭で「南星 大火に中りし

とき、子と清淇を渉れり」とうたっているが、おそらくはこの年の六月に、両者は清水・淇水のあたりでともに遊んだのであろう。

万歳通天元年九月に洛州参軍であったのならば、これより九ヶ月ほど前の万歳登封元年臘月（十二月）、武后が嵩山を封じたおり、宋之問は「扈從登封途中作」「扈從登封告成頌」（ともに五言律詩）、「扈從登封告成頌應制」（五言排律）を作っているが、彼はおそらく洛州参軍としてこの盛儀に参列したと見てよい。

陳子昂にはまた「同宋参軍之間夢趙六贈盧陳二子之作」という詩がある。詩中に「征戍、遼陽に在り、蹉跎として草は再び黄なり」という句があるところから、この詩は遼東に遠征して二度目の秋、つまり神功元年（六九七）秋に作られたことになる。宋之問はこのときにも洛州参軍であったわけである。陳子昂はこの詩の中で、方外の十友のメンバーであった盧蔵用と宋之問、そして自身の現況を次のように叙している。

高 木 重 俊

盧子尚高節 盧子は高節を尚び

終南臥松雪 終南に松雪に臥す

宋侯逢聖君 宋侯は聖君に逢ひ

驂馭遊青雲 驂馭して青雲に遊ぶ

而我獨蹭蹬 而るに我は独り蹭蹬として

語默道猶屯 語黙 道 猶ほ屯なやむ

「盧蔵用さんは終南山に隠棲して悠々自適、宋之問殿は聖君（武后）に巡り逢い、その参乗として大空高く駆け回る。それなのに私ときたら尾羽うち枯らし、出仕と隠棲の谷間で行き悩んでいる」とは、この時点における三人の境遇をそのままに述べたものである。

ところで、神功元年秋に宋之問が洛州参軍であったのは確かであるが、その後のことについては、両唐書本伝ともに「尚方監丞・左

奉宸内供奉に累転す」と記す。「累転」であるから、洛州参軍からただちに尚方監丞に転じたのではない。とすると、彼はこの間にいかなる官職を経たのであろうか。彼の「祭王城門文」は城門郎であった王某の祭文であるが、冒頭「維れ長安二年、歳次月日、司礼主簿宋某、謹みて清酌の奠を以て、敬みて故宮尹丞太原の王君の靈を祭る」と書き出されており、彼は長安二年（七〇二）には司礼主簿であったことがわかる。司礼寺は光宅元年に太常寺を改称したもので、礼楽・郊廟・社稷のことを掌る。主簿は二人で、従七品上。

また、盧蔵用の「宋主簿鳴皋夢趙六、予未及報而陳子云亡、今追為此詩答宋、兼貽平昔遊旧」詩は、陳子昂が没した直後に作られたと思われ、詩題に「宋主簿」とあるところから、宋之問は聖暦三年（久視元年、七〇〇）には司礼主簿になっていたことになる。そして彼は司礼主簿から尚方監丞・左奉宸内供奉に転ずるのである。

尚方監は、天子の御衣・御物の製造を掌る少府監のことで、武后の垂拱元年に改称された。丞は六人で、従六品下。宋之問は長安二年以降、神龍元年（七〇五）二月に瀧州参軍として嶺南に流されるまでこの職にあった。⁸⁾

宋之問は左奉宸内供奉を兼ねることにより、宮廷詩人としての地位を確立するのであるが、武后朝における彼の文学的活動は、張易之・昌宗兄弟との関わりをぬきにしては語れない。以下、張兄弟について簡略に触れる。

万歳通天二年（六九七）、太平公主は張昌宗を母である武后の近侍として薦めた。昌宗は次いで尚乘奉御であった兄の易之を武后に推薦し、兄弟は武后の厚い寵愛を受けることになる。聖暦二年（六九九）正月、武后は控鶴府の官制を整え、監・丞・主簿の官を置き、司衛卿張易之を控鶴監とし、銀青光祿大夫張昌宗・左台中丞吉頊・

殿中監田昇道・夏官侍郎李迥秀・鳳閣舍人薛稷・正諫大夫員半千らを控鶴監内供奉に任じた。おおむね武后の寵を受ける者と文学の士である。おそらく司礼主簿であったと想像される宋之問は、この選には入っていない。

久視元年（七〇〇）四月、武后は河南告成県の石淙山に新營した三陽宮に避暑に出た。五月十九日、武后は皇太子・諸王・群臣と宴し、みずから七言八句の詩を作り、唱和させた。『全唐詩』卷四六、狄仁傑の「奉和聖製夏日遊石淙山」詩の側注では、この時の参会者と作品とは、薛曜の書によって北崖上に刻まれていたという。それによると、参会者の官職と姓名は次の通りである。

皇太子李顯（中宗）・右奉裕率兼檢校安北大都護相王李旦（睿宗）・太子賓客上柱国梁王武三思・内史狄仁傑・奉宸令張易之・麟台監中山県開国男張昌宗・鸞台侍郎李嶠・鳳閣侍郎蘇味道・夏官侍郎姚元崇・給事中閻朝隱・鳳閣舍人崔融・奉宸大夫汾陰県開国男薛曜・守給事中徐彦伯・右玉鈴衛郎將左奉宸供奉楊敬述・司封員外于季子・通事舍人沈佺期

右の配列は品階の高い順であり、張兄弟が正二品の内史に次いで位置することに、彼らに対する武后の寵の深さが読み取れる。また、「沈宋」と並称され、宋之問と同年に及第した沈佺期の名が末席に見えているのに、宋之問の名はまだ賜宴の席にはあらわれない。

同六月、武后は控鶴府を奉宸府と改称、張易之を奉宸令とし、閻朝隱・薛稷らを奉宸供奉とした。五月十九日の石淙の宴における張易之、薛曜・楊敬述の「奉宸」という肩書は、改められた呼称で刻されたのである。武后は続いて美少年を選んで左右奉宸内供奉としようとしたが、薛懷義・張易之・昌宗がいれば内寵には十分でございまいしと、右補闕の朱敬則に諫められたという。宋之問が左奉

宸内供奉に任ぜられたのは、おそらくこの頃であろう。ただ、彼はこのとき四十五歳ほどで、「美少年」には縁遠い存在であったから、文学の才を買われてのことであつたのは言うまでもない。さきの石淙の宴に参列した楊敬述の肩書が「右玉鈴衛郎將・左奉宸内供奉」であるところから、宋之問の場合も「司礼主簿・左奉宸内供奉」あるいは「尚方監丞・左奉宸内供奉」であつたであろう。

武后の厚寵を背景に、張兄弟は放縱の限りを尽くし、武承嗣・武三思などの戚族さえも、彼らに倣事するに至つた。武后はそうした醜聞を掩い隠すために、同じ六月に張昌宗・李嶠を修書使とし、閻朝隱・徐彦伯・薛曜・員半千・于季子・沈佺期・張説ら二十六人の文学の士を集めて、『三教珠英』の編纂に当らせた。宋之問もこれに加わっている。『旧唐書』本伝に「三教珠英を修むるに預り、常に扈從遊宴」と記すように、彼が宮廷詩人として武后朝に立つたは、おそらく左奉宸内供奉を兼ね、『三教珠英』の編纂に加わつた久視元年（七〇〇）六月であつたと考えられる。

さきに述べたように、宋之問は五月十九日の石淙の宴には侍していなかったが、この時の武后の三陽宮滞在は四月から閏七月まで及んでおり、その間に彼は左奉宸内供奉を兼ね、『三教珠英』の編纂に参画し、「扈從遊宴」の身分となつた。彼の「三陽宮侍宴應制得幽字」は、この秋に作られたものである。

離宮秘苑勝瀛洲	離宮 秘苑	瀛洲に勝る
別有仙人洞壑幽	別に仙人あり	洞壑の幽
巖邊樹色含風冷	巖邊の樹色	風を含みて冷やかに
石上泉聲帶雨秋	石上の泉声	雨を帯びて秋なり
鳥向歌筵來度曲	鳥は歌筵に向ひ	来りて曲を度し
雲依帳殿結爲樓	雲は帳殿に依り	結びて樓と爲る

微臣昔忝方明御 微臣 昔 方明の御を忝けなくし
今日還陪八駿遊 今日 還た八駿の遊ぶに陪す

ここでは三陽宮が仙境に見立てられている。かような方外の趣きの描写は彼の得意とするところであるが、待宴応制の詩であるだけにさらに雕琢がほどこされ、律体ではないが、平仄の配列にも工夫がこらされている。尾聯の「昔 方明の御を忝けなくした」とは、かつて彼が洛州參軍として武后の嵩山登封に随従したことを指しているであろう。彼はその際に「扈從登封告成頌應制」という詩を上呈しているが、それは「待宴應制」の作ではなかったのであり、いま、武后を中心に、「八駿」になぞらえられる権貴の宴席に侍ることを得て、彼は無上の喜びにひたり、丹精を込めてこの詩を作っているのである。現存する作品から見ると、この詩が宋之問の宮廷詩人としての第一作であると考えてよい。

彼が武后期に宮廷詩人として立つのは、長安四年（七〇四）までの足かけ五年ほどである。この間に作られた應制詩で現存するのは、「龍門應制」「麟趾殿待宴應制」「上陽宮侍宴應制得林寺」「幸少林寺應制」「幸嶽寺應制」「松山嶺應制」ぐらいである。ただし、後二首は確定的でない。武后期における彼の行跡は、その詩作の技倆もさることながら、とりわけ張易之兄弟への阿諛追従ぶりによって知られる。『新唐書』本伝によれば、彼は閻朝隱とともに張兄弟の詩の代作をしたのみならず、彼らのために「溺器」を奉ずるほどであった。しかし、張兄弟や武氏一族などの権倖に佞附する姿勢は、宋之問や閻朝隱にのみ見られるのではない。『朝野僉載』巻五には、梁王武三思が張易之のために伝記を書き、彼を王子晋の後身であるとして緱氏山に廟を立てたという話のほか、鄭愔・薛稷・崔湜・蕭至忠・岑羲・趙履温・吉頊・宗楚客らが権倖に諂事し附託したエピソードを載せ、さながらに「諂佞人物伝」の觀を呈している。まさに、朝をあげて権倖に媚附すると言っても過言ではない現実が、彼の背景にあるのである。

長安三年（七〇三）の夏ごろ、皇太子（中宗）の娘の安樂郡主が武三思の第二子である崇訓に降嫁した。武三思はこのとき、宰相李嶠、蘇味道、詞人沈佺期・宋之問・徐彦伯・張說・閻朝隱・崔融・崔湜・鄭愔らに命じ、「花燭行」を賦してその盛儀を讃美させた。「詞人」としては沈佺期以下の八名が第一級であると認められていたことを示すが、「宰相」の李嶠や蘇味道にしても当代一流の詩文家であり、その才能が彼らに宰相の地位をもたらす源となっているわけであるから、詩文の才をもって立つ宮廷詩人が帝王を讃え権倖に奉仕するのは、みずからの地位の安定と昇進に密接に関わるものであった。しかも、「花燭行」を賦した前述の十名はすべて進士科や他の諸科の出身であり、門地を背景に官途を歩む者ではない。こうした宮廷詩人群の登場は、もとより武后の文学愛好と新しい人材の登用の方針によるものであるが、彼らによって構成される宮廷文壇は、齊・梁のそれが門地を有する文人貴族によって成り立っていたのとは違って、構成員の大半が科試によって登用された新興の知識人なのであった。したがって、みずからの立脚の基盤を安定した門地に置くことができない彼らは、自己の力量と宮廷内の人間関係に依存して身を保持せねばならない、極めて不安定な存在であったのである。

加えて、長安年間の挙人の任用状況は、『新唐書』『選舉志下』に次のように記されている。

長安二年・舉人授拾遺・補闕・御史・著作佐郎・大理評事・衛佐凡百餘人。明年、引見風俗使舉人、悉授試官、高者至鳳閣

舍人・給事中、次員外郎・御史・補闕・拾遺・校書郎。……、
時李嶠爲尚書、又置員外郎二千餘員、悉用勢家親戚、給俸祿、
使釐務、至與正官爭事相殿者。

つまり、長安二、三年には舉人や勢家・親戚の子弟の大量登用が行われたわけである。風俗使の舉人には、試官とは言うものの鳳閣舍人・給事中という正五品上の官を得る者もあらわれ、勢家・親戚の子弟二千余人が従六品上の員外郎を授けられた。風俗使が推挙する者の大半は勢家・親戚の子弟であつただろうし、李嶠が勢家・親戚の子を大量に登用したことには、権貴への阿諛の姿勢がうかがわれるが、いずれにせよ、権勢の家の子弟が大量に官に任じられたわけである。

このころ宋之問は従六品下の尚方監丞であつたのだから、新登用の勢家・親戚の子弟が続々と自分に肩を並べ、自分を飛び越して行つたことになる。彼の地位が人間関係の情実には左右されとなれば、また、彼がみずから敬慕する初唐の四傑の不遇の轍を踏むまいとすれば、彼には権倖に阿附するしか道が残っていなかったのである。もとよりそれは、彼の内面的資質にもよるだろう。彼の本伝には、例えば武三思のように「傾巧便僻」（『旧唐書』「武三思伝」）などの巧佞の資質を明確に表わす言葉はないが、かつての方外の交遊の精神とはおよそ隔絶した彼の内面的資質が、このような環境の中で一気に噴き出したのである。

しかし、「溺器を奉ずる」までの媚佞をもつてしても、彼は武后朝において重要視されることはなかった。『本事詩』「怨憤」には、宋之問が「明河篇」を上呈して北門学士の職を求めたとき、武后は「之問の才調を知らないわけではないが、口臭がきついから」と崔融に漏らした話が記されている。彼はおよそ学識とは関わりのない

ところで評価されたわけである。また、武后が洛陽の龍門に遊んだり、武后は最初に応制詩を完成させた左史の東方虬に錦袍を賞賜したが、後れて完成した宋之問の詩の方が優れていたもので、錦袍を取り上げて改めて宋之問に下賜したという。この「奪錦袍」の故事は、宋之問の優れた詩才を讃えるものとして伝えられるが、一面では、彼ら宮廷詩人が餌に群がる魚のような存在であつたことも示している。その魚の中で、心を傾けて権倖に奉仕し、最も餌の取り方がうまい部類に入る宋之問の、武后期においては尚方監丞どまりであつた事実が、宋之問、ひいては宮廷詩人一般の評価を端的にあらわしているだろう。

神龍元年（七〇五）年正月、高齢の武后は重病に陥つた。これを機に、張柬之・崔玄暉・桓彦範らが左右羽林兵を率いて宮中になだれ込み、張兄弟を誅殺した。二十五日、中宗が復辟して天下に大赦したが、張兄弟の党与は赦されなかった。宋之問も他の宮廷詩人とともに、嶺南への流謫の身となる。同じく張兄弟に媚附した武氏一族の勢力がそのまま温存されたにもかかわらず、政治的には無力に等しい存在であつた宮廷詩人が大量に流謫されたのは、それだけ彼らの行跡が衆目にとまるものであつたからであり、彼らを追放しても、新政権の基盤には何ら影響がなかったためでもある。武后が上陽宮に移され、張兄弟が誅殺されたいま、彼らを擁護するものは誰もいなかったのである。

三

神龍元年（七〇五）二月初め武后政権を支えていた宰臣姚元之・

章承慶・房融らが嶺南に流された。続いて李嶠・蘇味道・崔融・鄭愔・宋之問・沈佺期・閻朝隱・杜審言らの宰臣・詞臣たちも左遷された。沈佺期の「初達驩州」詩の冒頭に「流子一十八」とあるところから、十八名が流罪に処せられたことになるが、そのすべてはわからない。

宋之問は瀧州参軍に左遷され、洛陽から淮北を経て、江州（九江市）・洪州（南昌市）と南下して大庾嶺を越え、広州・端州（広東省高要県）を経由して瀧州（広東省羅定県の南）に到達する。途中、斬州黄梅県で寒食を迎え、彼は「途中寒食題黄梅臨江駅寄崔融」詩を作っている。崔融は袁州刺史に左遷され、宋之問と同じ経路で南下中であつた。宋之問のこの詩に対して崔融は「和宋之問寒食題黄梅臨江駅」詩を返した。その冒頭には「春分に淮北よりし、寒食に江南に渡る」とある。彼らは日を同じくして長江を渡つたのである。平岡武夫編『唐代の暦』によれば、この年の春分は二月二〇日、寒食は三月五日ごろである。彼らは、春分に淮北を経由したのであるから、洛陽を發つたのは二月中旬と見てよい。

江州からは舟で贛江を溯る。「自洪府舟行直書其事」という五十四句の長篇詩はその舟中で作られた。彼はその中で、「仲春に国門を辞し」てから、「休隙」のない「嚴程」のままに「風水を涉つ」てこの地に至つたと述べたあと、自己のこれまでの身の上を語りはじめる。自分はずっとと隠棲を理想とし、世に出るつもりはなかつたのだが、「謬つて紫泥の書を辱けなくし、翰を青雲の裏に揮ふ」ようになったのだと。そして、

安位霧潛構 位に安んずれば 霧つみ潜ひそかに構せられ
退耕禍猶起 退耕せんとするも 禍わざわひ猶は起る
棲巖實吾策 巖に棲むは実に吾が策

觸藩誠内恥 藩に触るるは誠に内に恥づ

.....

羣議負宿心 群議 宿心に負き

獲戾光華始 戾とがを光華の始めに獲たり

黄金忽銷鑠 黄金も忽ち銷鑠し

素業坐淪毀 素業は坐いながにして淪毀す

と、退耕せんとする願いとはうらはらに、黄金をも溶かし尽くすような悪意に満ちた「群議」によって、自分はこれまでの業績をすべて否定された、と述べる。最後に、羅浮山をはじめとする靈跡を探勝して歳月を忘れようと思うが、南溟の彼方に身を置くのだから、嵩山の別荘でのかつての自適の生活は永遠に不可能になったと嘆いて、この作品は結ばれる。

宋之問が方外への好尚を抱いていたことはすでに述べた。しかし、その反対に「栄達」への指向も強かつたことは、武后朝における権倖への佞附ぶりでも明らかであつた。その彼がいまことさらに方外への「宿心」を強調するのは、「群議」の悪意を非難するのと同じく、自己を正当化する方便のためである。彼には嶺南に配流されるほどの悪事を働いた覚えは全くなかつたであろう。一度たりとも国政の大事に関わつたことがなかつたのであるから。

大庾嶺を越えるといよいよ異域である。彼の態度は微妙に変化し始める。「早発大庾嶺」では、

自惟勗忠孝 自ら惟ただふ 忠孝に勗つとめたりと
斯罪愆所得 斯の罪 得し所に愆とがし
皇明頗照洗 皇明 頗る照洗せられしに
廷議日紛惑 廷議 日に紛惑す
.....

感謝鵷鷺朝

鵷鷺の朝を感謝し

勤修魑魅職

勤めて魑魅の職を修めん

生還倘非遠

生還 倘し遠きに非ざれば

誓擬酬恩德

誓つて恩德に酬いんと擬す

とうたわれる。自分は忠孝に勤めたのに、なぜこのように罪せられるのかわからない。皇帝がひたすら救済されようとしたが、「廷議」

が錯乱してどうにもならなかったのだ。彼が「自洪府舟行直書其事」

詩で述べた「群議」への怒りは、ここでもはつきり表われている。

と同時に、生還することがもし可能であるなら、必ず恩德に報いよ

うという恭順の意志もまた明確に表われている。

やがて北江を下って西江を溯り、瀧州江に入ると、旅の終りは目

前となった。「入瀧州江」詩では、隠棲への志向を前面に押し立て

た恭順の姿勢は、ますます強まっている。

余本巖棲客 余はもともと巖棲の客

悠哉慕玉京 悠なるかな 玉京を慕へること

厚恩嘗願答 厚恩は嘗に答へんと願ひ

薄官不祈成 薄官にして成るを祈めず

違隱乖求志 隠を違は志を求むるに乖けり

披荒爲近名 荒を披くは名に近づきしが為なり

.....

運啓中興曆 運は中興の曆を啓き

時逢外域清 時には外域の清むに逢ふ

祇應保忠信 祇だ応に忠信を保つべし

延促付神明 延促 神明に付かん

「隠を棄てて出仕したのはわが本志にそむいたこと、いま荒僻の

地に入るのには名に近づこうとしたため」という述懐は、「群議・廷議」

の悪意に責めを負わせていたこれまでと比べると、しおらしいばかりである。しかし、このような自省の言葉は、この時点においては

衷心から出た偽りのないものであるとしても、この自省が彼のこの

後の行動の規範となり得なかったのは事実である。

彼は嶺南の地において、含沙蜮・蠱などの毒虫、吻草・女草など

の毒草、瘴癘の毒氣、鯨のような異物、そして文身・鑿齒などの異

習の中に身を置く悲しみをうたいつも、一方ではまた、「過蛮洞」

詩の、

越嶺千重合 越嶺 千重 合かぎり

蠻谿十里斜 蠻谿 十里 斜めなり

竹迷樵子徑 竹は樵子の徑を迷はせ

萍匝釣人家 萍は釣人の家を匝めぐる

林暗交楓葉 林暗くして 楓葉 交はり

園香覆橘花 園香りて 橘花 覆おほはる

誰憐在荒外 誰か憐れまん 荒外に在るを

孤賞足雲霞 孤賞 雲霞 足る

という表現に見られるように、異域の中に方外の風情を見て心を

慰めようとする。「園香」の句は、布で覆われた橘の木から花の香

りがするという意味で、冬に木を覆っておくと、春から夏にかけて

橘の果皮が青く変じ、酸味な味になるという⁽¹⁰⁾。宋之問は異域の奇妙

な栽培法を描写しているわけである。

さて、宋之問が中朝に対して恭順の意を表わし、異域の方外の風

情に身を委ねようとしたのはポーズであったと断ずる必要はあるま

い。無力な詞人にすぎない彼には、他に取るべき方途がないのであ

るから。しかし彼は、この心情のままに瀧州で謹慎することなく、

約半年の後に洛陽に逃帰してしまう。いかなる動機と目算があつて

のことか不明であるが、彼が嶺南の風土を厭うていたのは確かであり、また、洛陽では自分がかつて奉仕した武三思が韋后に蒸して權力を掌握しつつあったことも、彼の計算に入っていたであろう。この逃帰のルートは桂州から全州を経由して湘水に乗って北上したと思われ、「自湘源至潭州衡山県」詩は、その途次のものと考えられる。この詩は湘水沿岸の風景が十句にわたって描かれたのち、

紛吾望闕客 紛として吾は望闕の客

歸櫓速已慣 帰櫓 速かなるは已に慣れたり

中道方汨汨 中道にて方に汨汨すれば

遲念自茲撰 遲念 茲より撰はる

頼欣衡陽美 衡陽の美を欣ぶに頼り

持以調憂患 持して以て憂患を調かん

と述べて結ばれる。詩中に「平沙 陽雁 覆す」という句があるところから、季節は秋から冬にかけてであり、彼の逃帰の時期と重なるが、掉尾二句の「衡陽の美を欣賞して憂患を払おう」とは、果して逃帰者の言であろうか。「望闕の客」の「憂患」は京師に至れば消えるのであり、この旅が洛陽まで連続するのであれば、途中の衡陽で心を慰めることもないわけである。まして、配所を無断で脱出した逃亡者に、このような余裕はないであろう。最終二句は、この旅が衡陽止まりであることをうかがわせもする。おそらく宋之問は、瀧州参軍として職務を帯びて衡陽あるいは長沙に赴いたのではあるまいか。そしてその用務先で洛陽の情報入手し、里心にも迫られて洛陽に逃帰したのである。なればこそ、逃帰行のさなかに作られたと思われる「渡漢江」絶句には、

嶺外音書絶 嶺外 音書 絶え

經冬復歷春 冬を経て復た春を歴たり

近郷情更怯 郷に近づきて 情は更に怯え
不敢問來人 敢て來たる人に問はず

と、さきの「自湘源至潭州衡山県」詩にはなかった不安感・緊張感が込められているのである。心がますます怯えて、すれ違う人に問う気も起らない、というのは、直接には家人の不測の事態が脳裏をかすめるためであるが、その不測の予感、彼自身の先行きに重なるものである。「敢て來たる人に問はず」は、彼の逃避行の心理の象徴と言える。この詩の承句では「冬を経て復た春を歴たり」と言う。彼は春に瀧州に流されたのであるから、「経春復歴冬」となるべきであるが、押韻の関係でこのように表現されたものである。とすると、彼は神龍元年（七〇五）の晩冬か翌年の正月早々に漢江を渡って北上して洛陽に入ったものと思われる。

洛陽に帰着した宋之問は、張仲之なる人物の家に匿われた。張仲之は駙馬都尉の王同皎らと謀って、韋后に蒸して国政を私する武三思を謀殺しようとしていた。宋之問はその密謀を察知して兄の子を使つて通報し、その功により配所逃帰の罪を免ぜられ、鴻臚寺の主簿に任ぜられた。兩唐書本伝に等しく記すところである。しかし、兩唐書で「兄の子」と記すのを含めて、この事件に関しては、通報者が誰であったかという点で、極めて異説が多い。以下、通報者が誰かについて、資料の要点を記すことにする。

〔旧唐書・王同皎伝〕王同皎らの密謀に加わった冉祖雍が武三思に通報。

〔新唐書・王同皎伝〕王同皎・張仲之・祖延慶・周憬・李俊・冉祖雍が密謀。祖延慶の妻が宋之遜の外妹であるところから、之遜の子の曇がそれを察知。また、かつて張仲之の家に宿った宋之問もその密謀を知っており、曇を使つて武三思に通報。

〔旧唐書・姚紹之伝〕外妹を祖延慶に嫁がせている宋之遜が密謀を察知。子の曇を使って通報。

〔新唐書・武三思伝〕王同皎・周憬・張仲之らの密謀を、冉祖雍・宋之遜・李俊が通報。

〔旧唐書・蘇珣伝附蘇晋伝〕張仲之は友人の宋之遜に告発された。〔新唐書・同伝では「宋之遜等」と複数形になっている。〕

〔太平広記・卷二六三〕宋之遜、引朝野僉載、張易之兄弟に諂附したかどで兗州司倉に左遷されていた宋之遜が、配所を逃帰して王同皎の家に匿われ、密謀を察知して甥の宋曇を使って韋后に上告。兄の之問と「羅織」して王同皎を死に追いやった。

〔資治通鑑・神龍二年、考異、引御史台記〕張仲之らの密謀を宋之遜の子の曇が察知。冉祖雍・李恠に知らせ、彼らが上聞。

〔同、引夷録〕王同皎・周憬らの密謀を李俊らが武三思に通報。

〔同、引唐曆・統紀・実録〕張仲之が密謀を誤って友人の宋之問に泄らし、之問は偽って冉祖雍・宋之遜らとその密謀に参画。張仲之を裏切つて甥の李俊に通報させた。

これらの資料はまことに紛々としていて、真相はつかみにくい。この事件の按問の過程で、告発の報賞を求めて多くの者が名乗りをあげ、偽証も含めて罪状を「羅織」していった結果であろうことは想像に難くない。とりわけ宋之問兄弟にとっては、配所逃帰の重罪が帳消しになるかどうかの瀬戸際であり、彼らが積極的に立ち回ったであろうことも容易に推測できる。前掲の資料の中には、宋之問兄弟、外妹、之遜の子の曇、兄弟の甥の李俊という、宋家に連なる者が多く登場するが、これも彼らの奔走ぶりを示すに足るであろう。

次に、この事件の按問の状況をもうしばらく追ってみよう。「王同皎伝」においては、両唐書ともに、武后の靈駕が発するのを期し

て武三思暗殺を实行しようとしたと記されている。武后が崩じたのは神龍元年（七〇五）十一月二十六日であり、靈駕が長安に向けて発引したのは二年正月二十一日であるから、王同皎らの暗殺計画が謀議され、密告によって彼らが逮捕されたのは、この二ヶ月ほどの間となる。〔資治通鑑〕「神龍二年」の条によれば、中宗は初め御史大夫李承嘉と監察御史姚紹之にこの事件の按問を命じ、のちに楊再思・李嶠・韋巨源らの宰臣にも参験を命じた。このうち李嶠は、正月二十三日に通州刺史から吏部尚書・同中書門下三品になっているから、彼が参験に加わったのは、早くとも正月下旬ということになる。王同皎らが処刑されるのは三月七日であるから、この事件の按問は一ヶ月余に達していることになる。按問の中で張仲之は武三思の罪状を述べ立て、その語は韋后に及んだ。楊再思と韋巨源は狸寝入りをして聞かぬふりをし、李嶠が姚紹之に命じて口を塞ぎ縛り上げて獄に送らせた。こののち、彼らの罪状が確定されるのである。

この事件ののち、「三思の五狗」と呼ばれる、武三思を取り巻く五人組が誕生する。侍御史周利貞（利用とも書かれる）・冉祖雍・太僕丞李俊・光祿丞宋之遜、監察御史姚紹之の五人である。冉祖雍・李俊・宋之遜は、王同皎事件の密告者として名が挙げられていた者たちで、その報賞として上記の官職を得たものである。姚紹之は事件の按問を担当した監察御史である。この報賞から、冉祖雍・李俊・宋之遜の事件への関与の深さが読み取れるだろう。また、宋之問は鴻臚寺の主簿（従七品上）を授けられるが、ともに配所から逃帰しているにもかかわらず、弟の之遜が従六品上の光祿寺の丞を授けられている。之遜の方が之問よりも積極的にこの事件に関わったことがうかがわれる。

宋之問は神龍二年正月には洛陽に逃帰していることになるが、た

とえ弟の之遜の主導によるとは言え、自分を匿ってくれた張仲之の罪を密告し「羅織」するのに加担したのであるから、その責任はもとより小さくはない。『旧唐書』本伝に「深く義士の譏る所と為る」と記され、『新唐書』本伝でも「天下その行ひを醜とす」と録されるのもつともなことである。

ともあれ、この事件のおかげで、宋之問は配所逃亡の重罪を不問にされたのみならず、鴻臚寺主簿の官職を得た。神龍二年三月のことである。こののち彼はふたたび宮廷詩人として、中宗朝に立つのである。

(待統)

〔注〕

- 1 之遜は、之遜とも書く。『元和姓纂』卷八によると、之遜はもと之望であったが、後に改名したという。また、兄弟の順序は之問・之遜・之悌となっている。
- 2 傅瓊琮「盧照鄰・楊炯簡譜」(『楊炯集・盧照鄰集』所収、一九八〇年一月、中華書局)による。
- 3 宋之問の排行には、五と十一との二通りがある。
- 4 注2の傅氏の説による。
- 5 道上克哉「陳子昂の交友関係——方外の十友をめぐって——」(『立命館文学』四三〇・四三二合併号、一九八一年七月)
- 6 陳子昂の生卒年は、彭慶生「陳子昂年譜」(『陳子昂詩注』所収、一九八一年二月、四川人民出版社)による。
- 7 『新唐書』「兵志」に、武徳から天寶以前の辺防の制を述べ、天兵・大同・天安・横野の四軍が河東道に属していたという。
- 8 『資治通鑑』「神龍二年」の条に、「初、少府監丞弘農宋之問及弟兗州司倉之遜、皆坐附会張易之貶嶺南、逃歸東都。」とある。
- 9 張説の「諫避暑三陽宮疏」は、この時の長期滞在を諫めたものである。
- 10 黄雨選注「歷代名人入蜀詩選」(一九八〇年一〇月、広東人民出版社)

11 二八ページ注。

注8に引いた「資治通鑑」の記事では、兗州司倉の宋之遜が兄の之問とともに嶺南に流されたとある。『新唐書』「王同皎伝」には「播州司兵參軍宋之遜」とあり、『新唐書』「宋之問伝」には連州參軍になったと記されている。おそらく、このどちらかであろう。

(本学助教 函館分校)